

~ 鶴のねぐら ~

せつり つるい
雪裡川・鶴居村



岐阜分室 辰巳 昌子
研究第四部 和田 明美

そこだけ時間の流れが止まっていました...。
何の音もしない。
水の音さえ聞こえなかった気がします。

雪裡川



早朝は気温マイナス20にもなる厳しい冬。釧路湿原の雄大な自然に囲まれた鶴居村。そこを流れる雪裡川(セツリガワ)を“埜(ねぐら)”に、タンチョウヅルは生きていました。英名を“Japanese Crane”(学名: *Grus japonensis*)と称び、“日本の鶴”を意味します。私たちに身近なところでは、千円札の裏側にその優美な姿を見せています。すらりと伸びた細く長い足、いっぱい広げると2メートルにはなる大きな羽、鶏冠の変形で皮膚の一部なのですが、ポッコリと赤い頭...。

私たちがその日見ることができた鶴は、雪の白い背景とも合って、何と気高いでたちなことでしょう。日本の雅さを思わせるこの風景に何か心動かされる自分達を「ニッポン人で良かった～」と思いながらシャッターをきっていました。

愛のダンス



江戸時代には日本全国でその姿を見ることができたタンチョウヅルですが、明治時代に乱獲と埋め立てや干拓などによって生息環境を追われ、一時は絶滅したとさえ考えられていました。大正時代に釧路湿原の奥地で十数羽が発見され、生息が確認されましたが絶滅の危機が迫っていることには変わりはありませんでした。そこで開

拓農家の方々が冬季の給餌を試みてくださったことにより冬の間の死亡率が激減し、今では約600羽の個体が確認できるほどになりました。春から夏の間を釧路湿原で繁殖しながら過ごし、餌の乏しくなる冬は群をつくって道内に数カ所ある給餌場やサンクチュアリでお腹を満たして暮らしています。いつも決まった“埜(ねぐら)”で夜をすごしますが、湧き水などのある、凍らない浅い川で、見通しのきく、風のあたりにくい場所が選ばれます。初めてのころは川原で眠っていたツルも、寒さが厳しくなると流れにはいり、だんだん深みへ入って眠るようになります。気温が氷点下の時でも川の水は暖かく、また害敵から守られているからです。



鶴の埜
鶴がいるのに小さくてわからない？

そこで選ばれたのが、雪裡川(一級河川釧路川水系)、流域面積67.7平方キロメートル、流路延長34.3キロメートル。その名前の由来はアイヌ語で、セツ・チリ・ウシ、巢・鳥・多き処から命名されているように、“鶴の埜”にはピッタリの川です。

中でも音羽橋付近は国内で唯一、タンチョウヅルの埜を観察できるポイントなのです。



とっぴんくっ

そこに立って思いました。

遠いアイヌの時代からタンチョウとともにあった雪裡川。

色々なことが生きづらくなっているこの時代、そして未来だけれど、これからもタンチョウヅルを見守って流れてゆけますように。